

仕上げ摘果を主体とした後期表層摘果による「肥のみらい」の商品化率向上

中生温州「肥のみらい」の若木期では、9月中下旬の仕上げ摘果を主体とした後期表層摘果をすることで、ML級果中心の階級比率が向上し、浮き皮果の発生が少なくなり、商品化率を向上できる。

農業研究センター果樹研究所常緑果樹研究室 (担当者: 相川博志)

研究のねらい

中生温州「肥のみらい」は、11月中旬には完全着色し、果皮色も濃くなるが、若木期は大玉果の割合が高く、浮き皮も発生しやすい。

そこで、品質良好な中玉果生産と浮き皮が軽減できる摘果法を確立する。

研究の成果

1. 仕上げ摘果を主体とした後期表層摘果（以下、後期表層摘果）は、8月上旬の粗摘果時に樹冠内部の小玉果のみを軽く摘果し、9月中下旬の仕上げ摘果時に樹冠表層の上向き果実や小玉果および大玉果を摘果する方法である。
2. 後期表層摘果は、慣行摘果より果実の日肥大量は小さく（図1）、ML級果の階級比率が高くなる（図2）。
3. 後期表層摘果は、慣行摘果より浮き皮の発生が少なく、その程度も軽い（表1）。
4. 後期表層摘果は、慣行摘果より果実がやや小さく、糖度およびクエン酸濃度に差はない（表1）。

普及上の留意点

1. 後期表層摘果は、慣行摘果に比べるとやや小玉になりやすいため、着果量などの樹体条件や気象条件で果実の肥大が見込まれない場合は、仕上げ摘果を早めたり、強くしたりする必要がある。
2. 所内の7、8年生（2010年、2011年時）「肥のみらい」のシートマルチとエチクロゼート散布を組み合わせた栽培を行った時の調査結果である。

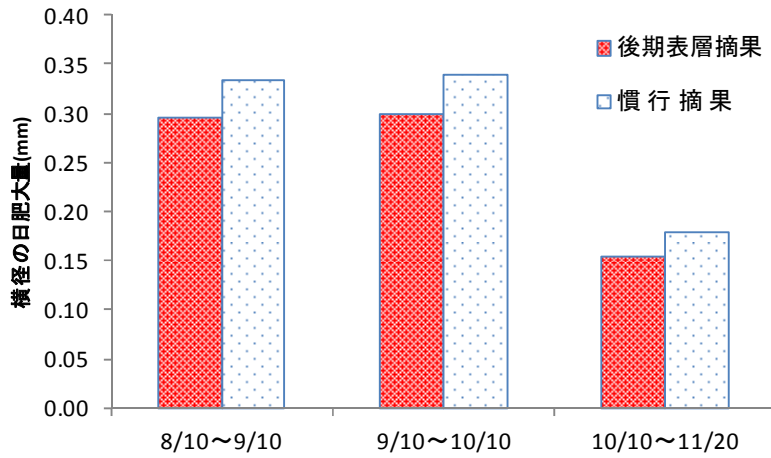


図1 摘果方法の違いによる「肥のみらい」の日肥大量の推移 (7, 8年生時の平均)

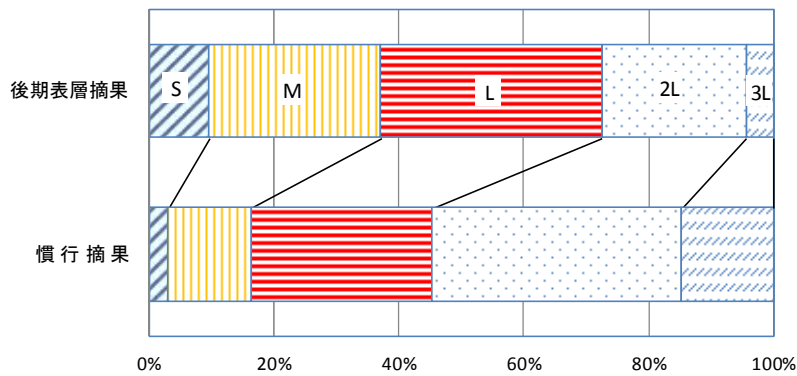


図2 摘果方法の違いによる「肥のみらい」収穫果実の階級比率 (7,8年生時の平均)

表1 摘果方法の違いによる「肥のみらい」の浮き皮発生程度および果実品質

樹令	処理区	程度別割合				浮き皮発生指数	分析果平均重 (g)	糖度 (Brix)	クエン酸濃度 (%)
		無 (%)	軽 (%)	中 (%)	甚 (%)				
7年生	後期表層摘果	87.6	9.5	2.9	0.0	5.1	108	13.4	0.77
	慣行摘果	69.5	21.9	7.6	1.0	13.3	111	13.0	0.85
8年生	後期表層摘果	91.1	8.9	0.0	0.0	3.0	129	12.3	0.68
	慣行摘果	74.3	21.8	3.9	0.0	9.9	148	12.3	0.67

注1) 7年生は11月26日収穫、調査、8年生は11月24日収穫、12月9日調査

2) 浮き皮発生指数 = $\frac{\text{軽の果数} \times 1 + \text{中の果数} \times 2 + \text{甚の果数} \times 3}{\text{調査果数} \times 3} \times 100$